

# A salvage technique using a fibrous sheath to avoid the loss of the central veins in cases of pediatric intestinal failure

近藤, 琢也

<https://hdl.handle.net/2324/7182252>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (医学), 論文博士  
バージョン :  
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)



(別紙様式2)

氏名	近藤 琢也
論文名	"A salvage technique using a fibrous sheath to avoid the loss of the central veins in cases of pediatric intestinal failure"
論文調査委員	主査 九州大学 教授 大賀 正一 副査 九州大学 教授 加藤 聖子 副査 九州大学 教授 山浦 健

### 論文審査の結果の要旨

主論文内容の要旨：腸管機能不全症（Intestinal Failure：IF）は短腸症や腸管の蠕動不良により自己腸管からの水分や栄養素の吸収が不十分な状態が長期に持続する病態で、小児では成長・発達のために長期的な中心静脈栄養（TPN）の併用が必須となる。TPNを持続的に使用するためには長期留置型中心静脈カテーテル（CVC）を留置する必要があるが、CVCの閉塞や破損、感染など様々な理由によりCVCの入れ替えが必要となる。小児IF患者は、長期にCVCを使用することから、頻回のCVC交換が必要となる。CVCを抜去した場合、中心静脈（CV）が閉塞する可能性があり、CVの喪失によりTPN継続が困難になると予後に悪影響を及ぼす。当科では、CVC交換に伴うCV閉塞の予防のため、CVC周囲に形成された繊維鞘（Fibrous Sheath：FS）を用いて、同一ルートからカテーテルを入れ替える方法（FS法）を行っているが、FS法によるカテーテル留置期間が穿刺法と同等かどうかを検討した報告はない。今回、申請者らはFS法の有効性を検討するため、後方視的検討を行った。

当科で治療中のIFの患者のうち、2009年から2020年の間にCVCの入れ替えを行った患者を対象に、後方視的に検討した。期間中に100例の入れ替えを行い、そのうち85例を対象とした。47例にFS法を行い、40例でFS法による入れ替えに成功した。穿刺法での挿入群と比較して、FS法による挿入でも挿入後の留置期間は同等であった。カテーテル感染症例に対してもプロトコルを順守してFS法を行うことで再感染率は高くないことが示された。FS法は、通常穿刺挿入方法と同等の留置期間を有しており、穿刺入れ替えに伴う合併症を防ぐこともできた。FS法は残存CV減少を予防しうる方法として有用であると考えられた。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。なお本論文は共著者13名だが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。